
新 未来の幻想

GORO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新 未来の幻想

【Nコード】

N0334T

【作者名】

G O R O

【あらすじ】

過去の世界から帰ってきた未来は夏の暑い中、課題に頭を悩ませる。

そして、そんな彼女の世界で新たな幻想が生まれつつあった。

第一話（前書き）

未来の幻想の続編です。

第一話が短くてすみません。

第一話

上条当麻がこの世界から消失した世界とはまた違う世界。

科学と魔術が交差する時、

上条未来の物語が始まる。

学園都市。

今や、どの国よりも科学が発展した。
そして、密かに科学と魔術が交差する都市。

そんな都市のとある学校にの一人の少女。

「むー……………」

上条未来は悩んでいた。

今、未来の手元には一枚の紙が置かれている。
そこには

「夏・指導考査のお知らせ」

先日、無断で学校を休んだ結果だ。

わなわなとその紙を掴み未来。

すると、そんな未来に小柄な一人の女性が近づいてきた。

「もうできましたか、上条ちゃん？」

その声の主は、この学校に長く居座りつつ、ベテランと言われた小柄な教師。

そして、未来はその教師の名をこう呼ぶ。

「子萌先生」

「はい、何ですか？」

返答を加え。

「無理です!!」

静寂がその場に漂う。

「はー、上条ちゃん。ダメですよ」

子萌はニコニコと笑みを作りながら、息を吐き。

バサツ、と。

「どっさり、課題はあるのですよ」

何十にも溜まった紙の束を未来の机にプレゼントした。

「不幸だあ」

未来は息を吐き、今。
とある喫茶店に来ていた。

そして、未来の目の前に、

「未来も大変なんだねー」

一人の少女がオレンジジュースを飲み、笑っている。

腰まで伸びた長髪に花柄の髪止めをつけた少女の名前は、

「人の気も知らず、佐天は……」

佐天涙花

母、御坂美琴の友人にあたる佐天涙子の娘だ。

「だっていつでも仕方がないのは事実だよ。無断で休んでたんだもん、自業自得だよ」

「うう……」

「それに、忠告のメール送っても返信は無し」

「それは……」

「そんな佐天さんに礼の一つぐらいはあっていいと思うんだけどな」

「……………ごめんなさい」

顔を伏せ、謝る未来。

佐天はそんな未来に、

「……………いいよ、別に気にしてないから」

ただし、と続け、

「今日の晩御飯は未来の奢りだよ♪」

え？と目を丸くする未来。

ニコッ、と笑う佐天。

「ふ、不幸だ……………」

未来はガクッとテーブルに崩れ落ちるのだった。

第二話

「ごちそうさまー！」

と、佐天はバタツと床に体を倒した。

未来は思う。

何故こうなったのだろう。

現在。

二人がいるのは、とある団地の一室。

そして、その一室の表札には、『上条』と書かれている。

結論から言わせると、今、佐天に奢るはずだった晩御飯を何とか部屋で、と言って許してもらった。

「はぁ……、今週の食費が」

ガクッと顔を伏せる未来。

「食費がって、未来はレベル4なのに何で苦労してるの？」

佐天が尋ねるのも、無理はない。

ここ学園都市は学生たちのレベルにより、貰えるお金の額が変わる。

そして、未来はレベル5の一つ下。

レベル4なのだから、貰える額はレベル0と比べて上になるわけなのだが、

「……いや、お金とかはママに九割渡してるから」

「九割！？って未来のママって確かレベル5の超電磁砲だよね！」

「う、うん……まあ」

何で何で！！、と尋ねてくる佐天に、やや後ずさる未来。

未来の母。上条美琴は未だに世界中を飛び回り、魔術師と協力してある人物を探しているのだ。

そう、

上条当麻を探して……

「……未来？」

「ふえ？」

「どうしたの、さっきから黙ったきりで。もしかして怒ってる？」
「あ、え、ちちがう！！ちょっと考え事してただけだよ！」

……そう、と納得のいかない表情を見せる佐天。

またやってしまった。と内心で悔いる未来。

過去から帰ってきてからずっとこうだ。

（ダメだな、私）

ぎゅう、と手を握る未来。

一方。そんな未来に気まずい表情を浮かべる佐天は、
（うう……、なんだろう。この空気……）

何か、場の空気を変えるネタはないかと考える。

そして、

「あ！」

「? どうしたの、さて」

「未来!!」

ガシッと未来の両肩を掴む未来。

「な、何? ……」

「未来」

佐天はニヤッと口元を緩め、

言った。

「未来って、お化け。信じてる?」

第三話（前書き）

最近、忙しかったためやっとの更新です。

第三話

翌朝。

未来は今、とある男子寮の目の前に立っていた。

「ここかな……………」

未来は昨日の話を思い出す。

『第七学区のとある男子寮に出るんだって。しかも、そのお化けは人の超能力を奪うことができるらしいの!!』

例え、お化けがいたとしても未来にとっては気にはならなかった。むしろ、気になったのは、お化けが現れるという男子寮、

「……………何でここに」

上条当麻が住んでいた男子寮だったからだ。

現在、誰もいない男子寮に未来は足を踏み入れた。
そして、ある号に足を止めた。

「……………」

未来はそつとドアノブを握り、ドアを開ける。

室内は上条当麻が住んでいたままの状態で残されていた。
上条当麻が学園都市からいなくなって直ぐにこの寮から学生がいなくなったのだ。

未来は玄関に入り、床につく埃を視線を落とす。

そこには真新しい足跡が残っていた。
そして、室内から感じる気配。

「…………一回しか言わないから」

ビリィ、と青白い火花が轟る。
未来は右手に意識を集中し、

「出てきなさい。じゃないと」

と、その刹那。

バゴン、と音とともに未来に何かが直撃した。

室内の埃が衝突の余波で空気中に舞う。

中。

パキインと音が鳴り、何かが床に転がり落ちた。

そして、転がり落ちた何かの側に。

上条未来は立っていた。

電撃による防壁。

自身の周辺に電気を漂わせ、一種のバリアを作る。
母親譲りの技だ。

「……………そう」

未来は息を吐き、足を動かす。

しかし、その直後。

今度は、バチィー！と音とともにまたしても未来に何かが放たれた。

何回やっても、と防壁を張ろうとする未来。

だが、次の瞬間。

「!？」

その向かってくるものが何なのか、未来は理解した。

それは、未来と同じ。

電撃の槍。

「くっ！」

未来は即座に頭から電撃の槍を放ち、電撃を粉碎する。

だが、その時には、

「!？」

未来は背後に一人の男が立っていた。
そして、男は漆黒の手を未来に向け、

『お前の力、貰うぞ』

未来に肩に触れようとした。

直前。

「……………残念」

バギン!!と。

未来と男の直ぐ側からその音は響き渡った。

「ぬ、ぬがあああああ!!」

男は苦しみながら未来から距離をとる。

未来は口元を緩ませ、軽く右手を振るった。

そう、現状を打開することができた…あらゆる幻想もぶち壊す。

幻想殺しの宿った右手を。

そして、

「悪いけど」

未来は右手を突き出し、

「アンタの幻想は」

宣言する。

「ふち殺さしてもらうわよ」

第四話（前書き）

久々の更新です。

第四話

幻想殺し。

善悪とわず、異能の存在を打ち消す。

未来はその右手を手で沈黙がその場を支配する中。鈍い足取りで起き上がる男を睨み付けていた。

「……………」

男は未だ震える手を抑え、鈍い動きで立ち上がる。そして、唇を動かす、

「……………い……………か」

「え？」

声が小さく、聞き取れない。だが口の動きで未来は男が何を言ったのか理解できた。

『幻想殺し』

直ぐ様、未来は男に向かって足を動かそうとした。だが、その時。

ボワ！！と破裂音が未来と男の間から聞こえた。
そして同時に強烈な光が未来の視界を塞ぎ。

「ッ……………」

視界が戻った時には、もう男の姿は、

なかった。

「……………助かりました」

あの場所からかなり離れた建設中のビルの屋上。
男は未だ震える手を抑え、目の前に立つ一人の女を見ていた。

「気にしないでいい。あそこに幻想殺しが来るとは予想外だったからな」

右肩の部分が破れた黒と赤が混ざりあった修道服に赤い十字架のアクセサリー手首に巻く女は髪を捲りあげ、

「ただ、幻想殺しが関わってくるとなると、私も出るしかないな」

「な！？何を言っているのですか！あなたのような方が」

「ラガウドが敗れたんだ。もはやお前たちだけでは勝てないだろう」

しかし、と言い淀む男。

「ふっ、心配するな。私を誰だと思っている？」

女は口元を歪め、笑みを浮かべ、

「法章聖、あかばく クロウ赤縛の十字」

「アザワ・シウルベストだぞ」

シウルベストをまるで歓迎するように夕焼けが彼女を照らした。

未来は男がいなくなった、未だ、上条当麻の部屋にいた。
手に一冊のアルバムがある。

「……………」

未来はその手にあるアルバムの一枚を見ている。
そして、そこには一人の少年が写っていた。

上条当麻。

それは、忘れることが出来ない。
未来の大切な幻想の一つ。

「パパ………」

未来はアルバムを抱き締める。

「会いたいよ……………パパ……………」

その小さな呟きとともに、一筋の滴が床に落ちた。

ロンドン。

「くっ……………貴様は一体…ッハ」

黒服を身にまとった男が地面に倒れた。

近くには似たような服装をした男たちが倒れている。

彼らの目的は、学園都市から来た一人の女の抹殺。

さらに学園都市の超能力者を封じるために、今はいない法章聖ラガウドから直々に受け取った一枚のカードを用意していた。

万全の態勢で女を殺そうとした。

だが、しかし。

「悪いけど、私にこんなおもちゃは通じないわよ」

未だ浮かぶカードに女は手のひらを向けた。

すると、その瞬間。

一枚の羽が空を舞い、その一瞬にカードは焼け焦がれ、ススとなっていく。

勝敗は既に決まっていた。

女性は小さく息を吐く。

すると、そんな彼女に一人の女性が走ってきた。

彼女はその女性に振り返り、

「あ、五和さん」

女性、天草式十字凄教の一人。五和に手を振った。

「私、ちょっと学園都市に戻ってみる」

女性と五和は今、近くのレストランで昼食をとっていた。
五和は口元を、お絞りで拭き取り、

「また、急ですね」

「うん。ちょっと最近の法章聖の動きがちよっとね。……あ、ごめんね五和さん。せっかく手伝ってくれたのに」

いえいえ、と謝る女性にそう言う五和。

「娘さんによろしくと言っただけです」

そして、五和は口元を緩ませ、

「お気をつけて」

笑って言った。

「美琴さん」

かつて超電磁砲と呼ばれた少女が再び学園都市に舞い降りる。

第五話（前書き）

良かったら感想お願いします。

第五話

謎の男と対峙した。その次の日の夕方。

「確かに、ミサカは未来のお姉ちゃんのような立場だよとミサカはミサカは言ってみたり」

とあるマンションに住む、昔と比べ大人の体に成長した打ち止めは目の前で土下座する上条未来を見下ろしていた。

そして、打ち止めは息を吐き。

だけど、と続け、

「毎回毎回、勉強教えにきてもらうのはどうかと思うってミサカはミサカは怒ってみたり!!」

「そこを何とかお願いします!お姉様!!」

未来は負けじと頼み込む。

まさかいきなりとは思わなかった。

朝、教室に着くと机に一枚の紙が置いてあり、そこに『明日までに課題を提出すること。 B Y子萌』と書かれてあった。

どうやら担任の説得も虚しく、各教科の教師たちに宣言されたらしい。

（うう、……知り合いの中で頼れるのは打ち止めお姉ちゃんだけ）

身内や友人関係で頼れる打ち止めに必死の頼み込む未来。

そして、ついに打ち止めも根負けしだし、後もう少しといった。

その時。

「オイ、上条」

背後からその声は掛けられた。

片手に杖をつき黒い皮ジャンを着た、白髪の男。

ソファーに腰を下ろすその男に未来は振り返り、

「あ、お邪魔してます！！一方通行おじさん」

かつて学園都市第一位のだった男、一方通行に手を振る未来。

そして、一方で、

「おかえりってミサカはミサカは言ってみたり！！」

喜ぶ打ち止めは一方通行にそう言って飛びかかろうとした。
だが、しかし、

「打ち止め」

「つと、何？ってミサ」

「お前、確か誰かと待ち合わせしてたンじゃねエのか？」

.....

ガタガタと打ち止めは直ぐ側に置いてある時計の時間を確かめ。

直後。

「い！行ってきます！！ってミサカはミサカは全速力で走ってみた

りいい!!!!」

全速力で部屋からいなくなっていた。

「……………」

現状を掴みきれない未来は、ゆっくりと一方通行に振り返り…。

そして、

「ふ、不幸だあああああ!!!」

「……自業自得だろオが」

未来の叫びが響き渡った。

やむなく、自力で頑張ることにした未来は今、第七学区の中央交差点を歩いていた。

辺りには沢山の人たちで埋め尽くされている。

未来は交差点を歩き、突如、交差点の中央で足を止め空を見上げた。

そして、

「人払い、使わないの？」

その瞬間。

その場にいた人ばかりは消えた。

まるで人のいない世界に変わったかのように。

だが、そんな静寂の中、

「いつから気づいてた？」

女の声が未来の耳に聞こえてきた。

振り返ると、そこには右肩から破れた赤と黒の修道服を着た赤い十字架がついたアクセサリーを手首に巻く女が立っている。

未来は腰に手をつき、唇を動かす。

「私、少しでも嫌な視線を感じると無意識に力使っちゃうの」

ビリィ、と未来の体から電磁波が漏れ出す。

それを見た女は、口元を緩ませ、

「ああ…なるほど、電磁波によるレーダーみたいな物か……………」

「……………アンタ、何者？」

「……………わかってる癖にいちいち言わせないでほしいな」

直後、その言葉とその瞬間に放たれた殺気に未来は舌打ちをし、

「法章聖……………」

「そう、法章聖、赤縛の十字」

女は手首に巻かれるアクセサリーの十字架を手を持つ、

「アザワ・シュルベストだ」

その瞬間に、十字架は形を変え、赤き剣へと姿を変えた。

「さあ、殺ろうか。幻想殺し」

そして、再び未来の前に法章聖が迫りかかる。

第六話（前書き）

やっと、戦闘編に入ります。

感想良かったらください。

第六話

行動は瞬時に行われた。

未来はシュザーラに向かって複数のコインを投げつけ、さらにそのコインに目掛けて電撃を放つ。

未来の得意技ともいえる技。

電磁乱射

電磁乱射はシュザーラに目掛けて以上なまでの速さで進んでいく。

「頑張るな、幻想殺し」

シュザーラは口元を緩め、片方の袖の中からスーパーボールくらいの赤い玉を取り出し、

「ふん」

電磁乱射に来る方向に放り投げた。
その瞬間。

ポォン！！と音ともに、赤い煙が漂い出した。

そして、電磁乱射がその煙を貫き進む。

はずだった。

「!？」

未来は直ぐ様、近場にあった建物の看板に飛び上がり、自身の能力を使い看板のふちの鉄の部分に引っ付いた。

そして、その直後。

電磁乱射が未来のいた場所に直撃した。

火花が立つ中、未来はその光景に対し眉を潜め、

（電磁乱射が反射された？……それじゃあまるで）

未来は一人の男の事を考える。

そう。

学園都市、第一位。
一方通行のことを。

だが、その一瞬の隙は、

「ツァ!？」

死に繋がる。

ブシュッ!!--と音とともに未来の肩を赤い十字架は切り裂いた。

突然の事に未来は能力から意識が離れてしまい、看板からその真下の地面に落ち、

「ッ!」

何とか顔からの落下は防げてたが、今ので左腕が使いものにならなくなった。

しかし、まだ終わってはいない。

頭上から赤い十字架が向かってくるのがわかった。

未来は自身にある力を使う。

あらゆる幻想を殺す。

幻想殺しを。

だが、
ブシュ！！

「ッああああああ！！！」

赤い十字架はその幻想すらを貫いた。

未来の悲鳴が響き渡った。
そして、その場に赤い血が流れ落ちる。

「的が外れたな」

シュザーラはゆっくりと未来に近づき、そして。

「アッ…!!」

未来の右手を貫く赤い十字架を抜き取った。

バタツと力なく地面に横たわる未来。

そんな未来にシュザーラは唇を動かす。

「この十字架が魔術で大きくなった。

と
思
っ
て
た
ん
だ
ろ
う
が」

シュザーラは赤い十字架を軽く振るいながら、

「それは外れだ。逆なんだよ」

その瞬間。赤い十字架は小さなアクセサリへと変換された。
それはつまり、魔術がかかった状態が小さな十字架だったのだ。

幻想殺しは異能の力を打ち消す。

だが、それに引き換え異能ではないものを消すことは出来ない。

荒い息を吐く未来にシュザーラは見下すように視線を向け、

「幻想殺し、諦めろ」

その言葉を言う。

「父親と同じ末路をみることになるぞ」

その直後。

ザワツ、と空気が一変した。

シュザーラは直ぐ様、未来から距離を取る。

そして、シュザーラは困惑する。

今、感じた恐怖はなんだ。

「諦めない」

直後。その声がシュザーラの耳に聞こえた。

前に振り向くとそこには、さっきまで動くことも出来なかった未来が、溢れでる血を気にせず右手を支えに立ち上がっている。

「私は」

未来は右手を突きだし、唇を動かす。

それはかつて助けられなかったあの時。
母に約束した。

「……私はもう諦めないって決めたの」

上条未来の幻想。

バチ…。

その瞬間に異変が起こる。

未来から体から放たれていた電磁波がその瞬間に形を変え。

薄紫色の光に変換された。

未来はその光を右手に集中させ、そして。

「はあああああああ！！」

刹那。

咄嗟にシュザーラが出した赤い煙さえも打ち消し、シュザーラのこめかみすれすれを通りすぎた。

よろよろ、体を揺らしながら、バタツと今度こそ、倒れる未来。

シュザーラは未だ茫然としていた。

今のは直撃していたら確実に死んでいた。

後、ほんの少しで……。

シュザーラの未来に対しての認識が危険へと変わった。

シュザーラは未来に歩み寄り片手に赤い十字架を握りしめる。
そして、未来の直ぐ側に立ち止まり、

「安らかに眠れ」

その赤い十字架は未来の胸を貫く。

それが行われる。

刹那。

ガギン！！と音とともに赤い十字架は空を舞い、真ん中からへし折られた。

シュザーラは震える片手を抑え、もう一度未来から距離を取る。

カタッ、カタッ、と靴の足音が聞こえる。

そして、その足音は未来の直ぐ側で止んだ。

足音の主は一人の女。

倒れる未来にしゃがみこみ、頬をそつと触ると女はゆっくりと立ち上がり、未来を守るように立ち止まった。

さらにその直後。

バチバチイッツイッツイッ！！

女と未来を除いた、その場一帯に雷のような電撃が落ちた。

女は怒りを抑えることなく、唇を動かす。

「アンタ、何」

かつて、学園都市第三位だった。

「私の娘に手だしてくれてるの？」

御坂美琴が再び学園都市に舞い戻る。

第七話

「超電磁砲…」

シュザーラは口元を緩めた。
その直後。

ポオン！！、と爆発音が御坂たちの足場から起きた。

だが、シュザーラは直ぐに手応えがないことに気づく。
頭上を見上げるとそこには未来を抱え鉄格子にぶら下がっている御坂の姿があった。

あの一瞬で御坂は未来を抱え、近場にあった鉄格子に能力を使い飛び上がったのだ。

爆発が収まったのを確認した御坂は手を放し、地面に着地する。
そして、眠る未来に視線を向けた。

小さな体で戦い続けた。あの男のように。

御坂は未来をそつと地面に寝かせ。

「!!」

刹那。

無数の超電磁砲並の電撃の槍がシュザーラに襲いかかった。

「……………」

しかし、電撃の槍が突如、地面からつき出された十字架によって遮

られる。

御坂の眉間にシワが寄る。

「アンタ、私をなめてるの?」

シュザールはニヤツと口元を緩ませる。
と、その直後。

ガチャガチャ、音ともに地面からつき出された十字架が開かれて、
その中には、

「……カード?」

御坂は十字架の中にある白く光るカードに眉を潜めた。

だが、その答えは直ぐ来た。

キュイイイイ!!

突如、辺り一体に音が響き渡る。

御坂はあれが何なのか知っている。

それはかつて、法章聖。

ラガウドが使用していた。

科学側と対峙するために作った対能力者封じのカード。

「これでお前の力は封じた。終わりだ」

勝った。

シュザーラの顔色がそう染まった。

しかし、その直後。

違和感を覚えた。

話によればこの音は能力者に対し、頭に強烈な痛みが伴うはずだった。

だが、目の前にいる超能力者にはその兆しすら見えない。

御坂は目を細め、呆れたように息を吐く。

そして、御坂はそっと、

囁くように呟く。

「……………ng…l……………」

その瞬間。

雷鳴がこだまし、落雷が落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334t/>

新 未来の幻想

2011年11月13日21時48分発行